

# 自己発達の言語的關係性領域に関する心理臨床学的考察

## — Stern D.の発達論に基づく言語機構 —

林 知 代

### 1. はじめに

芦屋論叢第 67 号、第 68 号そして第 69 号で自己発達を構成する 4 つの領域のうちの萌芽的關係性領域 Domain of emergent relatedness と中核關係性領域 Domain of core relatedness を間主体的關係性領域 Domain of intersubjective relatedness の 3 つの領域の発達機能に注目してきた。本論では、4 つ目の自己発達領域である言語的關係性領域 Domain of verbal relatedness を取り上げる。言語が操作可能になるまでに既に芽生え成長を続けている 3 領域の自己感に加えて、言語は、統合された自己感形成に関与する重要な役割をする一方、自己の断片化を起す危険性についても論議し考察を深めていく。間主観性理論を探究してきたボストングループ (the Boston Change Process Study Group, 2010) は、心理学における世界観について、心と身体は別個で異なる性質を持つというデカルト的概念が支配的であった歴史に言及している。つまり近年に至るまで精神分析においても言語と非言語体験はその性質が異なるという見解をとっていた。両者が一致したり相補的であったりすることがあったとしても、互いに常に別個で独立した現象であるとの考えに基づいている。こうした背景のもと心理療法、特に精神分析では言語を媒介にして解釈という技法を用いて治療をすることに焦点を当ててきた。しかし、Stern D.の自己発達概念である 4 つの発達領域、すなわち①Domain of emergent relatedness, ②Domain of core relatedness, ③Domain of intersubjective relatedness, ④Domain of verbal relatedness の統合という視点から見ると、自己を確立していくプロセスは言語と非言語は発達しながら相互に密接に関係して分裂不可分な関係の中に存在することについて、本論文で論考を深めていきたい。乳児の対人世界に見られるように、近年、乳幼児期からの、非言語や關係性が注目され、言語の新たな視点を再考することにもつながっているように感じる。

### 2. 言語操作までに発達する能力

言語が発達する前の 15-18 カ月に向かうと、象徴的遊びや象徴的言語が可能となり自分を客観的に捉えることが出来るようになる。Stern D. はこうした変化を Piaget の遅延模倣の概念に重ねている。そしてそれが行えるための必要な 4 つの能力を挙げているが、本論ではこれら 4 つの能力と言語との關係に触れながら提示していく。

#### 2.1 表象する能力・視覚的イメージと言語

言語が発達する前に、他者の行為を見たとき、それを正確に表象する能力が発達していることが明らかになっている (Stern D., 1985)。そのためには視覚的イメージが他の感覚へと変換され、当人独自の体験を記憶し、相手との相互交流によって精神表象を作り出す能力、つまり萌芽自己領域におけるあらゆる情報を感覚器官を通して知覚する「無様式知覚」の発達を意味していると考えられる。言語自己領域が生まれるとき

には既に中核自己領域も誕生し発達を進展させており、中核自己領域の十分な発達によって自己と他者は混同されず、別個の存在であることを認識している、という大前提がある。そして間主体的関係性領域の発達によって、他者に心があることを知る。これらが言語という能力の発達によって、精神原型や精神表象を明確に作り出すことが可能になると言えるだろう。

Meltzer, D. は、顔の表情による情動の表現と実際の生理的情動状態の間には、双方向的なつながりがあるという仮説を提示した。その後の乳幼児研究者である Stern D., Lachmann F., Beebe B. らも乳児が誕生時から親の表情を真似ることに注目し、乳児が大人の表情を真似るとき、自動的にその情動状態が自分の中で生起し、それに内省的に近づき、かつ相手の情動状態として位置づけることで大人の情動状態を理解するとの考えから、情動的状态を他者に賦与する機能は生得的に備わっていることについて検証をしている。

Beebe B. は乳幼児と母親の早期の相互交流調整パターンにおける自己表象と対象表象の前象徴的起源の概念を用いて、セラピストと視線恐怖症状を呈する成人女性クライアントとの治療場面を撮影後、面接場面を二人で観るという技法を治療に取り入れている。クライアントから発せられる言語を受けてセラピストが示すやや大げさなしぐさを伴う情緒応答から、クライアントが自身の情緒状態を知りセラピストとの情緒的交流を確認する。この映像を再度二人で観ることによって、クライアントは自分の内的状態を、自分の表出がセラピストによって鏡映 mirroring されフィードバックされていること知るのである。相手の反応が映し出されることで自分の心の状態を視覚から自己の表象を正確に知る体験となっている。自分の内的状態を知るためにセラピスト（母親）のミラーリングが重要であることが分かる。乳児の場合、鏡映は、親の情動状態と混同されないように乳児用の言葉や抑揚マザリーズ（母親語）によって誇張される。乳児は、親が示す情動のパターンと自分の生理的情動状態との空間的・時間的「一致 congruence」を感じとり、それを自分の状態として登録する（Gergely, G.,1995）が、この理論が Beebe B. の提示したケースで臨床的に検証されているといえよう。

## 2.2 身体的発達と言語

身体発達は自分の身体感覚が自己のものであると一致していなければ、子どもは様々な行動を思いのままにすることができない。言葉が話せるようになる前から、乳幼児は身体を使って自分の欲求を知らせようとする。言語を使用できるようになり、身体発達に加え他者とのコミュニケーションに言葉が大きな地位を占めるようになる。

対面での会話において、ジェスチャーや表情、仕草など身体の表現活動は言語が駆使されていることがわかるが、これらの身体機能は生まれる以前から活発に活動している。そして言葉が発せられるようになると、言語と身体のあらゆる細部の部位が同期的であることで、自己として一致していると感じることが出来る。身体に障害があるという条件の下でさえ、その同期性が失われることはない（McNeil, 2005）。自発的な対話の場合、自身が身体的に感じていること、例えば生氣情動、身体的不快、気分、潜在意識にある動機付けシステム（空腹感、睡眠、欲動）の状態、周囲からの感触などが、表現したいことと絡み合い、独自の内的体験として存在している。身体感覚の健康な認知は言語が発せられる以前に存在し、自己の一致感を確実なものとするために何を言語として表出するかは重要な鍵となる。言語を使って欲求を表現したいとき、その行為は身体全体を巻き込み、たいていは、類似の意識的・無意識的的事象すべてと繋がって表現される。身体的発達と言葉表出は不可分であり、自己発達の視点から見ると言語以前に身体の状態を捉え、感じ、考える、ダイナミックで綿密な調整が進められ、そのうえでようやく言葉が浮かびその最終的形をとる。MacnNeill (2005) は「人が宿る身体」という表現を使って身体のダイナミズムなしには言語が意味をなさ

ないことについて述べている。しかし、彼の考えではまず第1に言語があり、次いで2番目にダイナミックなプロセスがあるというもので、その後者をイメージ・ジェスチャーと呼び、それなしには人が生きていくという印象を与えないと捉えた。本論の発達の概念から考えると、身体受容体として心に浮かぶことと言語が一致するためには双方の発達を必要とすると考えられる。言語は身体で起きているダイナミズムをいかに表現するかということであり、たとえ幼児の数の少ない語彙力であったとしても、まず身体の認知発達が十分に機能していることが問われるであろう。つまり第1に身体発達が大前提にあり、第2に言語操作がそれに加わり両者同期的に機能すると考えられる。中核自己の關係性領域と言語自己の關係性領域についての在り方を示しているといえる。

### 2.3 喚起記憶能力と言語

言語が操作できるようになるまでに想像する能力が発達する (Stern D., 1985)。見たものを捉え、つまり視覚で表象を捉えた後、それを正確に記憶する能力が既に発達したうえで、それを真似て再現するという、Piaget の遅延模倣 *deferred imitation* の概念 (1954 : *The Construction of reality in child* by M.Cook, Trans. New York Basic Books) と Stern D. が提示した自己感発達概念の他者にも心があるとわかる間主体的關係性領域に関する概念に共通するものがある。Piaget の知的発達論は、第1期が0~2才の感覚運動期で言葉のない時期である。触って・見てとらえることが主になる。第2期で2~6才の前操作期で言葉によって違いが分かる時期、第3期は6~12才の具体的操作期、第4期は12才以降の形式的操作期、つまり抽象的操作期の概念で構成されている。これら4つの過程を経て知識・経験が増えていくという考え方である。そして第1期から第2期への発達段階で、言葉・表象・遅延模倣がみられるという。つまり目の前にないものを思い浮かべることができたのち、対象の行為や言葉を真似ることが起こる。

表象全体に対する想起、あるいは喚起記憶能力の発達によって、心の中で生じる情動と他者に向けて動いたり表現したりする作業とを調整し、一致させる能力が言語を使うにあたり、自己感の統一という視点から大変重要になるということである。

### 2.4 現実における2面性理解と言語

遅延模倣が発達の時期に明確に表れていないときでも、後に言語を使用し、例えば4歳の幼児がごっこ遊びで展開する、自分が連れられて行った病院で、待合から医者診察を受け、最後に支払いをするまでの再現場面でぬいぐるみを患者である自分に見立て、病院の医者やお支払い順を知らせる放送者になりきって遊ぶことを喜ぶというような事が起こる。Kagan, Jerome (1981) が指摘するように、このとき自己は、主観的体験であるばかりでなく客観的カテゴリーの能力も駆使しており両者が相互に進行しているとみることができる。

言語操作が始まる前の遅延模倣ができるためには、モデルになった表象に対して情動に伴う想像力を働かせ思考し、同時に自分自身による実際の行為の遂行という両者を観察できなければならない。故に自分と他者との心理的關係に気付いていていることを意味している。現実的に視覚でとらえたものを再現するためには主観的体験とそれに伴う情動が並行して生起しなければ、再現しようとは思わないだろう。

情動や行為や思考を言葉で統合させるには、これまでの自己感領域の発達がなされているかどうか重要な鍵になるということでもある。つまり①自己を反映 *reflection* の対象とする能力、②遊びなどの象徴的行為に従事する能力、そして③言語の獲得という、これら3つの事柄がうまく機能し合うことで、自己に関する個人的知識について他者と共有できる意味が取り決められるようになるのである (Stern D.1985)。

### 3. 他領域の発達不全による言語操作の危険性

言語の発達とともに、主観的な情緒体験、言い換えると生の体験と、言語で表象される体験の間にずれを生じる危険性について Stern D. は両刃の剣という言い方で説明している。本論では言語の発達に伴う他の3つの発達領域において両刃の剣という状況が生じる可能性について考察を深めたい。

#### 3.1 言語的關係性機能と感覚の關係性領域の表現の困難

子どもは誕生直後から外界からの刺激に対して無様式知覚体験としている。つまり五感覚に基づく快・不快の情動体験をしていると考えられる。Freud は、快・不快が情緒の始まりであると捉えたが、誕生直後から外界刺激を快・不快で感じる感じ方は、最も根源的な個々に特有な体験であり、Freud の概念を発展させれば、言葉が発せられる以前にすでに情緒が機能していると言ってもよいかもしれない。母子との交流については誕生直後から、もっと言うなら胎児の時から活発に知覚レベルで情緒が存在していると言える。

誕生後の無様式知覚体験において、例えば壁に映る黄金色の陽射しの斑点の強さ、温かさ、形、明るさ、などは知覚優位の感覚特性が共鳴する総括的な喜びに通じる非言語体験である。しかし言語が無様式知覚の体験に応用されるとき、子どもがまず学ぶのは、日常生活用語である事物や行為を表わす記号としての言語役割の方が、情動・情緒の言語表現より先行する。そのため無様式で生じている内的体験の多くは言語化されず潜行し、言語として浮かび上がったものが公式版となる。言語を通して内的状態を表現できるようになるには、ものや現象を共通の象徴として共有するよりさらに時間を要するのである。Stern D. の指摘するように、内的体験を表わす言葉より、事物に命名され語られた言葉によって内的体験が潜行し、情動体験は不連続の発現となる可能性がある。

外界との接触が広がり、子ども自身の思考や情緒や認知が発達するに従って、内的体験と他者へ向けて応答する言語の間に共通の意味理解による繋がりが深まると同時に、主観的体験の中で湧きあがる情動と言語化との不一致が起こりそこで生じるため、こうした欲求不満を体験する機会が次第に増えてくる。意味の共有媒体として他者との関わり合いを深めるはずの言語が、具体的な生の体験を伝達するのに言語というツールでは不十分な場合が起きるのである。個人的世界における認識で言語によって記号化された意味と、他者世界における認識で言語によって記号化された意味の間にどんなずれが生じたかを同定することが、関わり合いの中で非常に重要なポイントになるだろう。

ウィトゲンシュタインの、自分の内的経験、すなわち自分の感じや気分などを自分だけの用途のために書き付けたり、口に出したりできるような言語を考えることが可能であるかという問いは、一見ナンセンスに思われるが、彼の言わんとすることは、それほど内的体験と言語との解離が大きいということである。

例えば傷つきの感覚を例にとると、痛みに対応する心の状態が個人の中にまず生じ、それを「痛い」という語で表現する。しかし痛みの本当に私的な経験の部分、つまり体験からどのような情動・情緒が生じているかは「痛い」という言葉だけで伝えられず、他者はそれを推察できるだけで、当人と同じ痛みから生じる不快について全く一致しているわけではない。傷つき経験の私秘性は、痛みについての知識の伝達及び経験の伝達における言語機能以上に、推測に誤謬が入る可能性が大きいところにある。痛みの表現に使われた言語が、根源的で自然な感覚の表現と結び付けられその代わりになるなら、それまで泣くことしかできなかった子どもが言葉をどう使うかを学んだことであり、泣き声と等価の表出となる。しかし言葉を失うと、泣くということでは表現できない。

知識の共有として使用される言語と情動表出として使用される言葉の持つ役目の相違に気づかなければ、

食い違いや混乱、混同が起きる。両者の相違は、言語がどんな感覚様式を表わすために使われたかを特定する媒体としてというより、一般化されたエピソードを指定する媒体としての性質を持つことに因る。情動の言語化の困難さを補うために、言語を媒介としない瞑想状態、情緒的状态、芸術作品や詩や歌などが知覚刺激の発達の領域となっていくだろう。

### 3.2 言語的關係性領域と中核自己領域の解離

言語によって却って相互の關係が共有しにくいものになりうる理由として、①言語化により主観的体験と表現の間に齟齬が生じ内的に断片化が生じる、②主観的体験と言語表出が一致していても表わされた言語の意味が他者とずれる、③主観的体験と一致して表現された言語が、他者に不快に感じさせる、などがある。言語による内的状態の説明がいかに難しいかということである。子どもは内的状態に長く馴染んでいるにもかかわらず、最初に口にするのは、その内的状態を言い表す言葉ではない (Bretherton et al.1981) と言われるように、中核の自己感覚領域においても、言語は自身を明確にする働きをすると同時に、主観的体験に基づくニーズの言語化の困難さから言語表現と中核自己領域における体験の間に解離が生じ、所謂自己の断片化をもたらすことになる。

自己の中核となる自己感には、自己の情動性、自己の一貫性、自己の歴史性、自己の発動性という構成要素が存在する。この領域の十分な発達が機能することによって自分の情動状態を意志力に繋いだり、自尊感情や自己肯定感を抱くことができたりする。つまり自分のニーズを相手に伝える準備が整うことになる。言語が使用できるようになると、非言語の表出に加え自分の欲求を伝えることがより容易になる。体験を铸直したり、変換したりすることが出来るようになる。その結果、2つの世界、つまり体験しているが言語として表出されていない世界と、言語で表出された体験としての世界が生じる。しかし、この時、中核自己領域の発達が不全状態にあるとき、例えば余りにも感覚が鋭敏なため、あるいはあまりにも過酷な環境の為に不安感にとらわれがちな場合などのように、怖れの為に中核自己形成に発達の不全が生じる場合、恐ろしい世界から身を護るために自分の自然なニーズが潜伏し、他者の鎧で自分を守るべく環境に適応的に振る舞うという事が生じる。そのため自身の内的欲求と外的環境への過剰な適応的言動によって解離を生じ自己の断片化が起きる。言語によって自己を確認することは、自己を明確化させ、その時々を客観的に把握する働きがある。自己認知のために言語を介した思考の探究が必要とされる。言語はいわゆる自己を客観的に観たり抽象的概念を働かせたりすることによって、自身のニーズを認識することができると同時に、言語によって自己のニーズを消されてしまう可能性もあるという二律背反の機能を持つ。中核自己領域の発達不全のまま言語領域の発達が優位に占めると、そこに内的解離が生じることになる。

言語と中核時領域における体験のずれは、一貫性の継続、身体的に統合され断片化していない自己として存在し続ける事を妨げる。実存的自己と言語的自己が何光年も離れ、自己は言語によって分割されてしまっている感覚が生じるのである。

### 3.3 言語的關係性領域との他者との関わり合い領域の共有のずれ

社会や対人関係では言語は大きな役割を占めると同時に、他者との複雑な關係性に巻き込まれていく。世界には様々な言語が存在し、さらに母国語においてさえ意味の捉え方に多様さが散見される言語という観点から見ても、事物・事象にどのような言葉を所与されるのかは、初めからはっきりと決まったものではないということがわかる。間主体的関わり合いでの共にある体験が、並行する2つの主観性の感覚、つまり内的体験の共有を必要としたのと同様に、この新しい言語関わり合いのレベルでも、乳児と母親は、言語とい

う象徴を用いて共にある体験を作り上げる。乳幼児に関しては、言葉の意味はまず母子の間で取り決められる。意味は、言語で表された互いの中で何が共有されているかという合意によって決まる。相互に取り決められた意味（思考と言葉の関係）が、成長し、変化し、発達する。そして2人の中で検討され、最終的に“（母子）私たち”が共有する意味を持ち、言語という形で所有される。子どもが言葉を使用し始めても使用可能な語彙数は非常に限定的であるため、自分にはわかっていることが共通の意味を持たないためにコミュニケーションできず子どもの欲求不満が高まるという場合も出てくる。例えば言葉を使い始めた幼児が、すべての飲み物を「ジュース」と総称し、心に抱いているものは「ミルク」である場合、母親がジュースはミルクを意味していると了解しミルクが出てくるまで「ジュース」と言い続けるということが起こりうる。このような意味の相互取り決め過程を経ながら、外的世界にある物への命名が一般化し、母子以外の人々とも意味の共有が可能となる手順を踏む。そして取り決め共有された意味から成る概念は、対人関係理論へ繋がる含みを持っている。

子どもが話す動機は自分のニードの意味から発しているが、それが他者と共にある体験や、他者との相違を知る体験となり、関係の再確立することになっていく。話すことを学ぶ過程それ自体が、社交や社会における自己の再確立であり、ともにあるありかたを作り出す、という意味で鋳直しである。個人体験を、共同で作り上げるという意味の共有を構築していく言語の獲得が、一致や共にあることに大いに貢献する。たとえば、ヴィトゲンシュタインが例えに提示しているように、ある種の感覚が繰り返し起こることについて、その感覚を『E』なる記号に結びつけ、自分がその感覚を持った日には必ずこの記号をカレンダーに書き込み、[この記号の定義を]一種の直示的定義として与えることはできる。しかし書き留められた「E」の記号内容をこの“感覚”と呼ぶには、人に了解されるための正当化が必要である。

言語で表され、それを知識として習得することと言葉の間関係は、思考から言葉へ、そして言葉から思考へと連続的な動きのなかで知識となると考えられる。こうしたことは、その後、思考や感情が複雑になっていくと、子どもが何を心に抱き、どうして欲しいのかを親が理解できず、両者に齟齬が生じるということが起こりうる。

エピソードは言語的ふるいを通すため、言語能力が充分発達するまで表象されないこともあれば、永久に言語として表現されずじまいのこともあるだろう。

## 4. 自己発達から見た言語の役割

### 4.1 情動の共有を可能にするものとしての役割

言語は乳児により“発見され”たり、“創造される”ものである（Stern D.）。言葉の獲得以前に、体験から生じる情動はすでに活発に働いており、言語を使うことで自分自身の人生物語を構成し始めると言ってもよいだろう。つまり乳児が言語を使用するその時には、主観的な情動体験や思考はすでに心の中に存在しており、言葉と結びつく準備ができている。言葉より以前に思考は乳児の内部に存在しているということが出来る。しかし、言語が発せられるとき、発した当人と受け手の間で共有可能な意味を表す記号、あるいは象徴でなければ双方の意思疎通は難しいものになる。

共通の意味を持つためには母子のやり取りが絶対的に重要になる。福本（2004）は、ヴィトゲンシュタインが挙げた、「痛み」の感覚の例を挙げ、説明している。例えば子どもが自分の感じている感覚が「痛み」と呼ばれるものであることを知り、泣くだけではなく「痛い」という言葉を用いることを覚える。そこで

「痛い」を使えるようになるためには、痛い感覚を表わす言葉が「痛い」であると教える養育者の存在が不可欠である。言語を使えるようになることが、ヴィトゲンシュタインは単なる名づけではなく、「生活様式」を共有するようになることであり共同の世界に入る過程であるという。なぜなら、それは言葉の使用法を共有するというに帰着するからであると説明している（福本，2004）。他者と言葉が意味・意図・情動の表象として共有される最初の場面は、最も重要な養育者との関係、大抵母子関係である。つまり心の状態の基礎的な表現は、後天的に教えられた感覚無しに身につけられる必要があり、乳幼児期に培われ成立するといえる。つまり、母親によるフィードバックが必須であるということである。

#### 4.2 他者と関わり合う手段としての言語

言語は、他者と個人的な世界に関する知識・思考・経験を共有し他者と関わり合う手段となる。D.Sternの自己発達理論に限らず、乳幼児認知発達心理学の知見でも、間主体的関係性の芽生えの時期である9ヶ月から12ヶ月になった乳児は、行為者が空間を、目標を持って動くその意図を理解し、それを基に新しい状況で目標に向かう行為者の行為を予測できると言われている。Stern D.の考えでは、相手の心の状態を理解し、それを相手に関するものと位置づける生得的な機構が9ヶ月の乳児で働き始めているのである。言語の芽生える前に他者にも心があるということ想像し理解する能力が育っていることになる。それは生来的にそのような仕組みになっているからそうなるという単なるメカニズムの解明ではなく、メカニズム以前に、人間の最も中核には誕生直後から快・不快から始まり情動、情緒、感情にまつわる機構が整合性をもって存在することが前提となる。これらの機構こそ人間存在の意味を包含している。福本（2004）は、乳児が言語的に分節された意味の世界に入るためには学習が必要とするのは妥当な仮定であると述べている。対象との関わりを通して、個人的知識・思考・経験は共有され、共有された意味を通じ、社交上の交流が可能になる。

1970年代までの言語獲得の研究は、Chomsky N.に代表されるように、言語習得は本能的な知能であり、生得論の一部であるという考えが優勢であった。あるいはヴィゴツキーに代表されるように、思想が詳細な言語表現へ移行していく過程への注目が主であり、言語を形式的システムとして捉えたものだった。しかし言語は、固体化のための一手段でもなければ、一体感を形成するための手段でもない。話せる以前から持っている知識や社交上の交流や自分自身の欲求（自分の体験）を言語として組み立てていく機能と捉えられる。こうした観点により、他者との関わり合いにおける次の発達レベルに到達するための手段であるという自己統合に向けた視点から捉えることが出来る。言語という共有する意味を通じて、新しいレベルの精神的関わり合いの出現を可能する合体体験であると言える。ハンガリーの研究者ガーグリーは、それを「親の情緒的鏡映のバイオフィードバックモデル」として提唱した。つまり、他者との交流を通して綿々と続く人生問題である、愛着、自律、分離、親密感などの再遭遇の機会を与える際の重要な機能としての役割を持っているということである。

#### 4.3. 自己理解を助けるツールとしての役割 -客観的見解の深まりとともに-

言葉は他者と交流する手段として身に着けるツールであると同時に、自分の心の状態をどうやって知るようになるかというテーマに通じている。言葉を通して自己を意識化し明確化する。内的状態を表す言葉になるほど個人的要素が強くなり、共通の言葉を使用しても言葉の持つ意味が同じであると言い難いということが生じる。その意味の違いが、同一性や自己概念を確固たるものとするのを難しくする場合がある。

Werner と Kaplan (1963) は、Stern D. が言語の出現について両刃の剣であると指摘するより以前に、

言語について、総括的な非言語体験を構成する感情、感覚・気分、知覚、認知の集合体の一断片を捉えるものであることを述べている。そして言語が捉えるその一断片は、言語づくりの過程で変形され、元になる非言語体験から切り離された体験になっているとの見解を主張する。総括的な非言語体験から何を言語に変換すれば、言語が自己の統合を促進させるのか、また、反対に更なる断片化をもたらしてしまうのかを認識することは臨床場面においても、治療者がどこに反応して応答するかという問題提議と併せて重要な事である。言語化されなかった体験のほうが本質であると、何によって判断するのかという問題はあまり論議されていない。本論においては、その判断基準を、知覚を中心とした萌芽自己領域発達レベル、中核の自己感の発達レベル、そして社会的・社交領域における自己感発達レベルとの其々の関係を基底としていていると考える。その基で言語と非言語の一致として自己の統合が可能となる。これら領域の十分な発達がなされていないと、自己感覚の認知が総括的な非言語体験に間違った言葉を付与したり、総括的な非言語体験が、まったく言葉に変換されず意識化されないこともある。このような場合、体験は名前を付けられないまま潜行することになる。しかし体験としては存在するため、たとえば、萌芽自己領域との関連では音楽や美術や詩また精神分析において、また中核自己領域においては哲学や思索、科学あるいはスポーツなどを通して感動や共鳴や認知化に名前を付ける作業を行うことで客観的自己と言語化作業を深める。そのことは社会的・対人関係領域においても言語と並行して非言語領域との一体によって、解離したり断片化したりしている自己を統合させることとなる。

#### 4.4. 発動者としての自分と関わる手段としての言語

受動から能動への移行、すなわち主体的自己の獲得のために言語が活用される。Stern D. はその変化のプロセスを示唆する次の事例をあげている。2歳の女の子を寝かしつけるときに、いつも父親がベッドサイドにいてくれるのだが、女の子はあの手この手を使って父親を行かせないようにする。しかし遂に父親は行ってしまふ。父親が立ち去った後、女の子はまったく調子の異なる淡々とした語りとなり、独語、独白が始まった。出来事に関する自分の思考と知識を正確に言い表す言葉を見つけるのに苦労しながら、あれこれ試行錯誤し、より満足のいく形で自分の考えを伝える表現へとどんどん近づいていった。Stern D. はこの現象をWinnicottの言う“移行現象”と類似のものであると述べている。そしてこのプロセスは「内在化」が起こる過程であると指摘している。つまり、父親が去った後の一人ぼっちな受動的な恐怖と苦痛に満ちた心的状態から、言語化を通して、父親との対話の一部として語られたトピックスを、独白の中で繰り返し父親の存在を再活性化させることによって、自己の主体性を復活させ、自分の感情をコントロールすることを可能にしていると言ってもよい。

Stern D. が述べているように、言語が話せるようになるということは、自分自身の人生物語を語れるようになることを意味する。言い換えれば言語によって自分自身に対する見方を変える可能性を秘めているということである。彼は、物語づくりは、おしゃべりや問題解決や純粋な記述とは異なる思考様式であり、意図や目標を持つ発動者としての自分を捉えることを含んでいると述べる。見捨てられた受身の心的状態を、言語を操ることによって自分自身の物語を主体者として作り出す作業として捉えることが出来る。陰性の情動を潜行させず、期待や想像力を言語を駆使して、受動から能動へ移行させることによって発動者としての自分と関わることに成功しているのである。

#### 4.5. 象徴的な遊びができる能力の促進としての言語

18～30か月になると象徴的な遊びや象徴的な言語使用が可能になる。つまり自分を客体化して考えたり



捉えたり、その場にはいない人とコミュニケーションできるようにする。Lichtenberg (1983) は Herzog (1980) が提示したその具体的事例で、家族を置いて出て行った父に対して、幼児は、象徴的な代理物(人形)を操作することによって (a) 現在の家庭の状況の理解, (b) かつてはこうだったという記憶, (c) こうあって欲しいという望み, これらをもとに現実を修復しようとした点に注目し、精神図式と行動図式を調整する能力の考察を行っていることに言及している。言語を媒介として、事実はどうであろうと現実はどうあって欲しいという願望を抱き、過去の記憶、現在の現実、過去に基づいた将来への期待を織り交ぜながら想像すること、即ち象徴化を可能にさせると言えるだろう。Stern D. はこの3つの連動こそが、言語化されるべき質的体験であると言う。これら3要素が影響しあいながら言語によって象徴的思考を発展させていくプロセスは、成育過程で母子交流の際に言語化され応答された際、言語を介して母子の間で物事を共有するためのパターンと異なる、主観的に体験した独自のエピソードが形成される。

期待が過去のある限られた部分だけに基づくなら、願望のみに終始してしまう。これらの3つの要素の統合調整が機能することで、4.4 で示した主体性と言語の働きに関与しながら、言語が象徴的遊びを可能にする。この象徴的遊びとは、生の体験を超越したり新たなものを作り出していく言語の働きであり、人間が自己の統合を可能にする際、重要な役割を言語が担っているといえるのである。

## 5. 心理臨床における言葉から読み取る勾配的意味

言語では表現しうる情動状態のカテゴリーの分類に「幸せ」、「寂しい」などと名前をつけて自己理解と他者との相互交流を促進させる働きがある。その一方で、「いかに幸せか」、「いかに寂しいか」のようにその程度の特徴を表すのはより困難であり、その程度を知るには言語だけではなく身振り手振り、表情、声の強弱、イントネーション、リズムや間合いの取り方などに示される、非言語表現が欠かせない。また、生気情動相互間の不一致や、表出の一部の不調和などに関して、乳幼児でも不自然さを感じる能力を持っていることがわかっている (Stern D 1985)。このことは各情動の勾配を捉える能力を子どもが既に持っているが、不一致感を言語で補償することが難しいことがわかる。勾配情動の程度の特徴が勾配(少し幸せ、とても幸せ)であるのに対し、カテゴリーそれ自体の特徴は勾配ではない(幸せか幸せでないか)。勾配的意味そのものを表わす言語がない。言語はカテゴリー性の情報を扱うにはうまくできているが、勾配情報を伝えるには扱いにくい媒介なのである。しかし日常の対人間のコミュニケーションにおいて、もっとも決定的な情報を伝えるのは勾配情報である。相互のコミュニケーションの中で、非言語的、勾配情報は否認されやすい。言語的表現が困難なのは、情動状態のカテゴリー化以前の、そして情動の勾配を伝える言語化の困難さ以上に、感覚レベルに付与される言語化の困難さである。もし感覚レベルをうまく言い当てる言語があれば、自閉特性を持つ群が他者とのコミュニケーションをとれないということは生じないのかもしれない。自閉特性においては、萌芽自己領域における知覚の鋭敏性が特徴の一つともいえる。非言語領域と言われる知覚領域の世界が感受性の多くを占めていることを考えると、彼らが自分自身の主観的体験を言語で表現することがいかに困難であるかが容易に想像できる。自閉特性を持つ群が言語によって自分の体験を他者に伝えようとすると、言語がいかに使用媒体として不適切であるかということである。

## 6. 自閉スペクトラム症と言語領域の関連について

Tustin はクライン派であったが自閉症の治療に関して、Kohut H. の「外傷後ストレス症候群」の概念を取り入れ、クライン派が重要視する攻撃性を脇に置いた。これはクライアント自身の視点に注目し、自閉症に生得的な脆弱性を想定することの妥当性を示唆している。自閉症における脆弱性の特徴として言語が貧困化することを挙げられるが、福本はその理由として次の2つを想定できると言う。一つは名づけの場面が成立しないこと、もう一つは、前言語的な共有された世界から閉め出されることである。それは言語によって自己理解を深めることが障害され、また他者との共有されるべき情動を表出するチャンスを失くすことを意味する。「何かを」「感じる」と言うとき既に共通言語として機能する多くの言葉が用いられる。命名は単なる記号化だけではなく、命名されるその語の背景には、言語に包含される多くの意味が既に存在しているのである。例えば感じる表現として心の痛みと名づける際には「こころ」「痛み」という語の使われ方が既に準備されており、それが新しい語の配置によって共通概念を示唆するのである。

自閉特性を持つ群が他人の痛みを理解出来ないことがしばしば指摘されるが、そもそも彼らが体験している情動は、前言語的な「根源的反応」であることが多く、言語による共通概念から外れてしまう。周囲との勾配レベルの格差、及び感覚を表す適正な言語選択が難しい前言語体験のために、自閉特性を持つ群は他者と共有し合う言語が極端に少なくなる。そのために、意味の共有が構成されず自己を映し返してもらうことが出来ない。自己の経験全体を描写する言語的な枠組みが自閉症では殆ど言語が準備されていない状態にあるともいえるだろう。このような自己の明確化ができない事や、言語として他者にそのずれを伝えられない状況を考えると、「生活様式」自体が、自閉症の場合、通常の人とおよそ一致しなくなることは想像に難くない。考えや意見の違い以前の同一の言語の共有を媒介にして先ずは他者と一致する。生活様式の一致なのである。共通であると感じられないと、異空間に住んでいるような根本的な疎外感に付きまといわれる。共通言語が通じない外国に一人いるようなものである。

事物・事象に対する共通認識の為の記号として言語があらわされ、理解し、その規則には従っていても、それは自らの主体的選択を意味するものではない。言語が意味や意義を持たない状態である。彼らが陥りやすいルーティンや慣習についての自然な理解・内的実感がなくままに規則として従わなければならないことになるというリスクを含んでいる。自らが自閉症であったドナは、社会のルールに外れてしまうことに触れ、ルールを尊重していないわけではなく、その場ごとに無数にあるそれらのルールに、全てついていくことができないと述べている。感じ方の違いから周りの人の感情や意思から起こることは、自閉症者にとって予測することは不可能であり起こることは不意打ちに思われるのである。こうしたことは、共有できる言語を持たない事と大いに関係しているのではないかと思われる。

クライアントに自閉特性が軽度であっても存在するとき、感覚-生理的次元での恐れや不安について考えなければならない。独自の体験をしているクライアント自身の語りの世界から、セラピストは何を求められているかを読み解くには、診断名を列挙・説明するだけ、あるいは客体化された技法からの分析的解釈では意味をなさない。症状の診断名や解釈にこだわるのではなく、クライアントが自己統合の危機をどう理解するかは心理臨床において重要なことである。精神病的事態では恐怖が幻覚としてであれ心的に形態化され、投影されている。これは Bion の言う「幻覚症における変形」(彼は真実『O(オー)』を知ることが精神分析の本質であると考え、客観的認識を追及していく過程で、主体による変形が必然的に発生することに眼を向けた。例えば自分自身を表出するとき、伝達法として言語や絵画、彫刻、写真、音楽等を媒体とするなら、その現象は L,H,K によって扱われるため、変形をこうむるという (Bion の記号の意味する点を深めることは

本論では扱わない為、本表現にとどめる) 水準の経験で、それが働かないときは寧ろ、本当の破局である。これをクライン派のいう付着同一化・自閉隣接ポジションなどの第三者的概念としてではなく、本人が何を体験しているかという視点、つまりその世界を Kohut H. の共感的観点から知ろうとすることこそ、解釈がどこまでどのように有用かへの疑問点についての答えとなるのではないだろうか。自閉特性群における心性の共通言語について考えることは重要な事と思われる。

## 7. 臨床場面における4つの自己発達領域を見据えた共感の効用

多くの精神分析的な心理臨床家は主として、クライアントの言語化される内的体験を手掛かりに理論と照らしつつ象徴化し、技法を用いながら自分の理解を言語化する作業をしている。それは、特にクライン派に特徴的な象徴的解釈と、全ての学派においても言語化された判然としたプロセッシングが優位であることを想定している。Beebe B.ら(2005)に代表される乳児研究における間主観性理論は、それとは対照的に、凝視、顔の表情、空間的位置づけ、触れ合い、姿勢、発生の韻律的及びリズム的次元を含む、コミュニケーションのうちでも暗黙の、手順的次元を重要視する。前象徴的情動と暗黙のプロセッシングを扱うと言ってよい。理論に基づいた技法に重点を置いて言語化された解釈が、実際の臨床場面、特に子どもや心理的に自己の断片化を呈した状態のクライアントに適切であるのか、という点に疑問を投げかけているともいえる。言語で表されたことに捉われ過ぎると、言語の背景にある情動的な力動が表に現れないまま潜行する。言語は、それ以前に発達する情動や活動や思考などのもとに成り立つことを臨床場面で再度認識される必要がある。それ程言語としての表出は心的に強い影響力を持ち混乱を招くということである。

赤ん坊が不安であるとき、母親は赤ん坊の不安体験を感じ抱いてぴったり自分にかかえることで赤ん坊は理解されたと感じ穏やかさを感じるだろう。この時、保護する気持ちに一致した言語が更に伴うことで安定の度合いを強めることが考えられる。もし母親が赤ん坊の不安に共感的になれずパニックで反応したり、壁を作って切り離したりする行動に加え、自身の感情を偽る不自然な言語掛けや否定感情の言語化等で更に不安な情緒を広げる形によって、関係性に否定的な心的構造結果をもたらすだろう。

Kohut H. (1984) は、分析者からの理解としてクライアントに言語を媒介させて伝える際、罪悪感や疑念無しに、温かみのある声と自身が選んだ言葉と、臨床家としての自分の関心がそこへ深く関与している方法の重要性について述べている。こうした姿勢は、セラピストの情動に基づく言語化であり、Kohut H. が強く提言した共感の形である。彼は共感の最も良い定義を「代理内省」(1978 b 第1巻 205-232) の概念でクライアントの内的体験に視点を置いて考え、感じる能力に言及した。

知的になされた言語理解・説明、誤った解釈の与えるクライアントからの治療的衝撃を、①歓迎されない防衛的な策略と解したり、②クライニ的に不安や罪責感を惹起させる攻撃的な性欲動・願望との痛切な直面化を避けるための企てと解したり、③フロイト流に現実原則と成人の道德の非難とによって反対されなければならない、時代遅れの性欲動・快楽へのしがみつきの解したりする、などはセラピストの言語と情動の解離をクライアントが感覚的不一致として捉え、自分の本質的ニードとずれていることの内省を治療者に求めているとも言えよう。

Kohut H. が指摘したのは、人生初期から人間にとっての切実な要求は減衰した共感(すべてを含みこむ共感にではなく減衰した共感という点が重要である)に触れる事である。故に抽象的なあるいは一般論的な方法で応答するなど共感に触れるという意味では全く意味をなさないことを示唆しているのである。具体

的に何をクライアントは要求しているのか、彼・彼女の応答してもらえていないニードは何なのか、不安はどの共感の減衰部分から生じているのかについて、クライアントが提示していることや語ることから理解を深めていくとき、言語は自己一致感すなわち自己の統合を強める機能が持つと言える。

### 【参考文献】

- Basch, M. (1988) : *Understanding Psychotherapy*. New York : Basic.
- Beebe Beatrice, Lachmann Frank M. (2005) : *Infant Research and Adult Treatment : Co-constructing Interactions*. The Analytic Press. 乳児研究と成人の精神分析—共構築され続ける相互交流の理論. 誠信書房.
- Beebe B., Knoblauch S., Rustin J., Sorter D. (2005) : *Forms of Intersubjectivity in Infant Research and Adult Treatment*. Other Press.London. England. 丸田俊彦監訳 (2008) : 乳児研究から大人の精神療法へ—間主観性さまざま—
- Chomsky, A. N. (1998) : *Reflection on Language : Chomsky's Classic Works Language and Responsibility and Reflections on Language in One Volume*. 井上和子, 神尾昭雄, 西山佑司翻訳 (1979) : 言語論—人間科学的省察.
- Freud, S. (1914) : *On Narcissism*. Standard Edition, 14 : 69-102. London: HogarthPress. 1957. 懸田克躬・吉村博次訳 (1969) : ナルシズム入門, フロイト著作集第5巻, 人文書院.
- 林知代 (2017) : 誕生最早期における自己の統合に関する臨床的考察-感覚の閾値に代表される気質的差異. 芦屋大学論叢第67号, pp 23-34.
- 林知代 (2017) : 自己発達における中核自己感領域の発達構成要素に関する心理臨床学的考察. 芦屋大学論叢第68号, pp 51-60.
- 林知代 (2018) : 自己発達における Intersubjective (間主観的) 自己領域に関する心理臨床学的考察. —Kohut から Stern への自己の発展的概念を中心に—. 芦屋大学論叢第69号, pp 67-75.
- 福本 修 (2004) : 「心の理論」仮説と『哲学探究』アスペルガー症候群[から／を]見たウィトゲンシュタイン 精神科治療学 第19巻09号.
- Piaget, J. (1937) : *The construction of reality in the child* First published in 1999. Routledge is an imprint of Taylor & Francis, an informa company. 滝沢武久, 佐々木明 (翻訳) (1970) : 構造主義 文庫クセジュ 468, 白水社.
- Kohut, H. (1984) : *How Does Analysis Cure?* Chicago : University of Chicago Press. (本城秀次, 笠原嘉監訳, 「自己の治癒」, みすず書房, 1995).
- Kohut, H. (1987). *The Kohut Seminars*. (Elson, M. Ed.). New York : W.W.Norton. 伊藤洸監訳 (1992), 「自己心理学セミナー」1・2・3, 金剛出版.
- Kohut, H. (1996) : *The Chicago Institute Lectures*. (Tolpin, P., & Tolpin, M. Eds.) New Jersey : Analytic Press.
- McNeil (2005) McNeill, David (ed.) (August 2000). *Language and Gesture (Language Culture and Cognition)*. Cambridge, England : Cambridge University Press.
- 松木 邦裕 (2009) : 精神分析体験 : ビオンの宇宙—対象関係論を学ぶ. 岩崎学術出版社.
- Stolorow, R., Brandchaft, B. & Atwood, G. (1987) : *Psychoanalytic Treatment : An Intersubjective Approach*. New Jersey : Analytic Press. 丸田俊彦訳 (1995) 「間主観的アプローチ, 岩崎学術出版.
- Summers, F. (2011) : Kohut's vision and the nuclear program of the self, *International Journal of Psychoanalytic Self Psychology*, 6, 289-305.
- Werner, H. & Kaplan, B. (1963) : *Symbol formation : An organismic-developmental approach to language and expression of thought*. New York. Wiley.
- Licthenberg (1083) : *Psychoanalysis and Infant research*. Hillsdale, N.J. Analytic Press.
- Herzog (1980) : *Sleep disturbances and father hunger in 18-to-20 month-old boys*.